

「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されている(コリ 3:3)」。私たちがもう死んでいるって、何のことだろう。今私は生きていて、命が隠されている感じはない。

聖書には謎めいた言い回しが数多あり、キリスト者が必ずしも実感しているわけでもない。とはいっても、「私たちは死に、命はキリストと共に隠されている」という十字架の教えは、いわば渦の中心であり、イエスの伝承や言葉などをゆっくり回転させながら引き寄せている。私たちはすでに死んでいて、その命はキリストのものとして永遠の内に隠され、神の日の到来を待っている(3:4)。

コロサイの町は古くから東西の文物が行き交う地。宗教的にも、ユダヤ人の律法(2:16)、地中海特有の天使崇拜(2:18)、難行苦行する秘教が(2:23)、坩堝で掻き混ぜられ沸騰している。

多民族・多部族がごった返す旧市街のバザールを想像してほしい。身近な所ではアメ横か、鶴橋か、ドンキホーテ(ディスカウント店)の空気か。こうした宗教的混沌を「うおっ、おもしろい」と思うか、「不純でけがらわしい」と感ずるか。

こんな町に、キリスト共同体が新たに形成されつつあった。その信仰の中心には「あなたがたは死に、命はキリストと共に神の内に隠されている(3:3)」という独自の渦が回転していた。

コロサイの町に限ったことではない。現代日本の宗教状況も熱くはないが坩堝。甲府刑務所の教誨師は十数人いるがキリスト教は私を含めて二人。会合では各宗派の僧侶や神官らと席を並べる。

日本ではキリスト者の人口比 1%以下だが、イエスの言葉や人物は「急角度」でも受容される。ところが中心渦の「私たちは死に、命はキリストと共に隠されている(3:3)」は類似のものがなく不可解だろう。

日本にあって仏教儀礼や地域の祭礼などを警戒する教会がある。文化的慣習と宗教作法は明確に区別できないが、「私たちは死に、命はキリストと共に隠されている」という信仰の根があるなら、どんな宗教的混沌に踏み込んだとしても大丈夫。

逆に言えば、他宗教や異文化、相互に規制し合う共同体の中で少数者としての自由と希望を失わないためには、くり返し「私たちは死に、命はキリストと共に隠されている」信仰の根っこに立ち戻る必要があろう。いや現代では、他宗教などではなく、SNSで仮想現実には溺れたり、金融ゲームに熱中していることの方が、反キリスト的な「偶像」ではないか。

「主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは～あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった(申命 7:7)」から。地上の力である強い経済や武力、有用な知識や社会とは無縁な民が、主なる神に顧みられた。私たちキリスト者は顧みられて神の民とされているのだから、地上の力を求めない。

私たちが頼みとするものは「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されている(コリ 3:3)」という静かに回転する渦、私たちが信仰の中心に引き寄せていく聖霊の力だ。

「隠された命」によって地上を歩む私たち。命は無限に遠い天上の神に隠され、この地上で大胆に、自由に、誠実に、どんな偶像をも恐れずに歩む。私たちの命は「神の内に隠されている」ゆえにいかなる禁忌もない。

無限に遠い神が、キリストによってこの地上で「死んでいる私」と共に在る。私たちは人間としては貧弱だが(申命 7:7)、隠されている我が命は、己が死をも超えていく(コリ 3:4)。



《おまけのひとこと》

バナナの葉に乗せた4種類のカレーを混ぜて手で食べるインド人 付合せのヨーグルトまでかけちゃうほどの混沌 私はビビンパさえ掻き混ぜないで食す キリストなくしてそこへは踏み込めない